

講演
(ひらいでかずや)
平出 和也



アルパインクライマー
~転機となった山々~



山岳カメラマン
~斬新な撮影を目指して~



2017年
~人生を賭けた登山~

未知と困難への挑戦



危険なところで、高いパフォーマンスを発揮できるタイプになりたい

陸上部に所属していた私は大学時代には競歩で全国クラスの選手だった。しかし、決められたルールの中で他人と競う競技スポーツに限界を感じ、自由な発想で活動できる山岳部に魅力を感じ方向転換。数年後の2001年にはクーラカンリ(7381m)初登頂を果たし、山とともに生きる人生がスタートしたのである。



『山に登る前、自分は何のために行くのか、誰と行くのか、何を持っていくのか、すべて自分で決めなければならない。その過程に最も充実感、やがいを感じ山頂に立てたかどうかということとは大きな問題ではない。だから、たとえ撤退した場合であってもそこに大きな悔しさはない。』

隠された課題を見出す嗅覚、

それに伴う技術、そのバランスが必要

『僕以上に登れる人なんて国内でも海外でもいくでもいます。でも、もし僕が人より優れている部分があるとしたら、人のやったことのない“課題”を見つける嗅覚、そしてそれを成し遂げる能力、そのバランスかな』いくら登る技術があっても、その課題を見つけることができなければそこには絶対にたどり着くことはできないわけですから。カメット峰の未踏の南東壁という魅力的な課題を見つけ、それを登攀しえたこと、それがピオレドールにつながったのです。

人の夢をサポートする登山

山で撮影をすることはもうひとつの僕の生きていく道です。そこには自分しか撮ることのできない世界がある。そしてその世界をリアルに伝える事できる手段として、多くの登山家に同行し撮影している。そしてそれが僕にしかできないサポートという方法でもあった。

最大の危機、救援ヘリの墜落、失意の中で得たもの

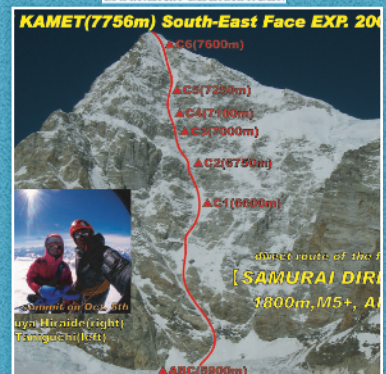
2010年11月、ヒマラヤ山脈のアマ・ダブラム(6500 m)にて。山頂まで残りわずかの所で、不安定な稜線で身動きが取れなくなりヘリコプターでの救援要請をした。その救助ヘリはバランスを崩し氷壁にクラッシュ。数千mの谷底に落下し、ネパール人2名の救援隊が死亡する事故となった。

『僕は生きて還するためにはどうすればいいのか、、、人間は自然の中では本当にちっぽけな存在であることを痛切に感じた』その後、事故にあったネパール人の家族に会う・『あなたたちに責任はない、彼らは生まれた時からそういう運命にあった。新しい生命をもらったと思って、今後も登山を止めないで欲しい』という言葉で私たちの方が助けられることとなる。
(一部、FAUSTインタビューから)

Piolet d'Or

ピオレドール賞

フランス語:Piolet d'Orは、優秀な登山家に贈られる国際的な賞。「登山界のアカデミー賞」の異名を持つ



== 講演内容(予定) ==

- ▼幼少期の登山との出会い
- ▼競技スポーツから登山へ転向
- ▼初めてのヒマラヤ遠征
- ▼自分の登山方法を見つけた旅
- ▼転機となった山々
- ▼山岳カメラマンとしての始まり
- ▼2017年人生をかけた登山